

## 在特会の論理 (14)

——交際相手に勧誘されたN氏の場合——

樋口直人

(徳島大学総合科学部)

### Logics of *Zaitokukai* Activists (14)

The Case of Mr. N

HIGUCHI Naoto

University of Tokushima

#### 1. 経緯

2011年11月18日にM氏に聞き取りした際(樋口2012g)、「付き添い」でN氏(30代男性)が同行していた。2人は交際しており、N氏はインタビューを受けるという認識がなく単に同行してきたという認識だったが、聞き取りを依頼した。本稿は、それを再構成したものである。

#### 2. 政治に対する関心

いろいろな事件があって、たとえば湾岸戦争があったりとか、小学生のときですけど、そういうテレビで言われている一般的なことには興味があったんですけど、特にどういう政策がどうだっていうのは、そんなに深くは考えてなかったですね。

(投票は)毎回ではないですね。興味持ち出してというかある程度自分で、自分の責任を自覚し出して行くようになりました。僕の場合遅かったんですけど、23(歳)くらいですかね。それまでは政治家なんて、一般に言われている「誰がやったって一緒」みたいなのがあって、自分のためにしかやってないという意識で、誰に入れても一緒かな、みたいな一般的な意見ですかね。そういう風潮ではありましたね。自分が行動することに対しても責任があるし、沈黙することにも責任があるんで、行動するほうに変わった。

(投票先は)政策問題になりますね。人間的なことになって、やはり能力のある人を選びますね。政治家ですから発言することに説明能力のある人とか、自分がみようとする政策に対してメリットとデメリットをちゃんと答えられる人を選んでます。(支持政党は)特にないです。今も、民主党があまりにひどいからですね、民主党以外ならということ——まあ共産党とかはないですけど。

(投票先は)自民党になってきますね。保守というのの論理が、論拠がちゃんとしてるじゃないですか。保守というのは、自分の——「守る」ということで。改革とかそういうのは、改革するけどその先に何があるかを見せれる人間がいらないですからね。保守は、自分の主張があってちゃんといえるんですよ。で、自民党になってきたと思いますね、どうしても。比例も。場合によっては、比例は投票しないということもあったんですけどね。自分も一貫して同じ主張というわけではないです。社会状況とか環境によっても考え方が変わってくるからですね。

#### 3. 外国人との接点、「外交」への関心

結構いますね。深い付き合いということではないですが。(学校の同級生で)いました。中国(人)ですね。

外国人問題(への関心は)は、10年くらい前にで

すね、自分の家でパソコンをしだして、それまでネット環境もそんなに整ってなかったですね。10年前からブロードバンドが普及してきて、つなぎ放題みたいな感じになってインターネットで証拠を得るようになったのが一番大きいですね。それまでは、それほど関心はなかったんですけど。

(関心を持ったのは)日本の外交問題とかですね。歴史観であつたりとか、日本がやってる政策——海外に対してのですね——そこに対して理不尽というか納得のいかない部分が多かったというのがありますね。たとえば、戦後補償問題とかですね。なんで私達の、たとえばおじいさんがそういうことをやったとしても、それでなんで現役世代の私たちに責任がある(のか)、そういうこと。誰も(政治家が取り上げないので)政治の問題にならないです。

情報がですね、一方的な情報でなくてやはり自己責任ですね、情報をどう選ぶかという、その責任を意識しだして、その情報は嘘かもしれない、でもそれを信じたからには自分にも責任があるというか。そういう関係になって初めて、情報に対する自分の方向性だとかがみえてきたってことですかね。新聞とかそういう風なのは、一方的で——事実であつたとしても——事実が10あるうちの1個。伝えたい側の意向が入るわけですね、(メディアは)それを選ぶことができるんで。まあ、膨大な量の情報からピックアップすることには向いていないんですよ、メディア自体。

(歴史問題に対する)関心もあつたんですけど、分からない時には自分1人のことで精一杯で、社会のことにに対して積極的に働きかけることはなかった——学生時代もですね。バイトとか忙しくて、そういうのはありましたね。ただ、インターネット自体には興味ありました。その頃ちょうど最新技術の走りみたいなのが出てきてですね、それががらっと変えるんじゃないかなって、そういう風な期待はありましたね。今、ソーシャルネットワークとか発達してますけど、これはちょっと変わってくるんじゃないかという期待が。ネット社会とかいうのには興味があつたんです。(インターネットを本格的に使うのは)ブロードバンドが普及しだしてですかね、10年くらい前から。一応パソコンは家にあつたんですけど、レコーダーとか深夜しか使えないという制約があつて、あまり使わない。自分で買ったパソコン

を持って自分でつないで、それからです。

(見るのは)最初の頃は掲示板サイトですね。それは責任を持ってない人がいっぱい集まる、そういうのに辟易してもう見なくなつたんですけど。僕は一切書き込みはししないです。顔が見えないと卑怯なことになるわけです。責任もないわけですよ、それって。何の意味もないです。リスクを課しないと何も生まれてこないです。あとはYoutube だとか。(トピックとしては)政治のことに限ってでしたらですね、外交問題が一番です。日本の将来とかどうなっていくか、という。どういう風に自分なりに予測を立てていこうかな、ということで見ましたね。日本が抱えている問題もありまして、少子高齢化だとか、産業の構造の問題だとか、別に外交がどうこうじゃなくて全体的にですね、なんでも見ます。

(在特会関連では)在日朝鮮人問題と、韓国に対する戦後補償問題、それと北朝鮮の問題ですね、拉致問題。それには興味がありましたし、あまりにも偏つてるといふのがあつて。それに対してどういう風な主張があるか、自分1人で思つていてもわかりませんでしたかね、ネットを見ないと人がどう思っているのかっていうのは。ネットだとわかりますね。わかるけどそれも玉石混交というか、そうすると何が……。その中でも自分の主張に合うような、合うというか——反対意見も取り入れてはいるんですけど——そういう風な意見も多数みるとあとは自分の考えのどこに責任を持たせるかな、ということですね。

(有益なサイトは)ニュースサイトだとか海外のメディアとか、日本の国内だけでと言われていたというのだとわからないですね。他の国がどう言う風に見てるんだってというのを客観的に見たうえで、日本がこういうところおかしいなというのが見えてきますね。身近なものでいえば『東亜日報』とか『中央日報』とか『朝鮮日報』とか、韓国メディアがほとんど対日の話題が多いですね。そこで見てくると、何でこんないわれを受けなければならないんだ、社会全体がああいう風なイメージだ——論調もそうなのですね。これを変えないと日韓友好なんてあり得ないじゃないですか。基本的には排斥したいとかなんか、相手をいじめたいとかそういう気持ちじゃないんです。本当に友好するのなら、その問題を避けては通れない。戦後補償問題も、もう解決しているって言って、それをまだ引きずる。一生解決

なんてありえない、それはずっと永遠に。そうすると完全に解決するには、やはり何らかの変革がないといけない。

(そういう感覚を持つようになったのは) ワールドカップの時とか、そういう風なイベントがあるたびに反日活動ってのがクローズアップされたりするじゃないですか。なんでこういう風な意見があるんだって思うんですね。日本人で生きて今まで生まれてきて、僕たちの世代とか海外に対して何した、悪いことしたっていうものはないからですね。そういう風に言われる理由があるのか、と考えてですね——それですかね。

#### 4. 在特会との接点

《参加のきっかけ》

(在特会のサイトをみることは) まったくなかったです。(交際相手が) 地元で街宣をやっている時に誘われて、行ってみて。最初は反対意見だったんですよ。いろいろなリスクを考えたとき、女の子の身でそういう活動に参加して、いろいろなリスクがある。リスクを背負うだけの活動なのか、と疑問を持つわけですよ。反対意見というか、古いやり方だと思ったんです。みんなで集まって組織を作って、シュプレヒコールをあげたりとかデモ活動するっていうのは、古いやり方だと。ネットとかアップして、あと分散して個人でやって行くやり方(のほうが良いやり方) なんじゃないかな、と思ってたんですけど。でもそれ、実際知らないですからね、やってる活動ってのを。

(交際相手に誘われたのか) そうですね。昔から会社の(同僚で) ……仲良しになった時にはこういう活動しているとは知らなかったです。(参加したのは) 2年くらい前ですね。1年半前くらいですかね。彼女のほうが先輩になる。(オルグされたということか) そうですね、簡単に言えば。そうやってしまうとあまり信念のないやつと思われそうですが。

(政治に関してカップルで話すことは) 政治問題には興味を持ってたんで、普通の人のレベルだとは思いますがね。詳しく論文をみたりとか、そういうのはないですけど、どの新聞のどの社説がいやというのにはなかったです。(他者との) 政治問題(に関する話) は——テレビをみながらこういうことについてどうこうというのはありましたけどね。まあ

でも、ある程度悪者を決めてしまってそれで思考停止している人が多かったんで、それ以上は進まなかったですね。どう自分達でアプローチしていこうか、というのはなかったんで。

(最初は彼女が) 街宣をしているところに出掛けて、(車を) まわさせられた感じですね。徐々に徐々に(関わるようになり)、自分でも興味を持てたからですね。こういう人たちがいるんだなって。それまで自分のなかでの想像でしかなかったからですね。レッテルで、こういう人たちがやってるんじゃないか、こんな日曜の昼間からやって、暇な人たちがやってるんじゃないか、みたいなあるじゃないですか。自分の趣味もないんじゃないかって感じで。そしたらそうではなくて、真剣にやって主張もあるし、個人の趣味も持ってはる方で、それでもなんか活動しなくちゃいけない。(活動してみてもそれまでの先入観は) なくなりましたね。普通の人(がやってるん) だって。(在特会の趣旨には) 賛成ですね。はい。活動に参加していると本当にいろいろな人がいて、魅力ある人がいっぱいいて。人物に魅かれる部分もあります。

《ネットとリアル》

ネットの情報は、いろいろな情報があるんですけど、リアルじゃないじゃないですか。実際に活動してみると、地元では誰も注目してくれないかもしれないけど、誰か注目してくれる人がいる、ネットで生中継したらそれに対してコメントが入ってくる。賛成してくれる方もいれば、批判してくれる人もいる。リアルに批判を受けることなんてそんなになくから。在特会にいと、公安の方だとか警察の方だとかのお話を聞くことができ、ある程度リアルに近づくじゃないですか。そこところが、プロセスが大事だなと思ってですね、実際に人間と話してみ——例えば、「反原発とかしている人たちはこういう人たちだ」みたいなレッテルを自分で貼ってしまうからですね、何も知らないと。

実際に直接会ってみて、それで話をしてみてもという主張があるのか、というのをリアルで聞いてみないと、自分でそこでとまってしまうから、主張がですね。人間安易な方向にいくから、レッテルを貼って安心してしまおうということになるから。リアルな部分に近づけていこうという努力を、そのために

ですね。やっぱり、ネットだけじゃ限界があると思うんですけど。ネットで自分で情報を仕入れてそれを人に拡散するだとか、そういう風な活動だけをしてたらリアルな情報は入ってこないわけですね。それは大きな失敗になるんですね。

穏健派の保守みたいな、「汚い言葉を使ったりするのはよくないんじゃないか」っていう、そういう気持ちがあるじゃないですか。「あなたたちの主張は、まあそれを普通にやってくれ、それをわざわざ汚い言葉で言わなくていい」そういう風な。もっと有益な情報というのは、図書館とかに行ったりすればもっと美しい言葉で語れて、もっと何か高級なものとしておいてあるからそれを見てやればいいんじゃないか、そういう意見もありますよね。わざわざ声を荒らげて差別発言のようなことを言う必要はないんじゃないかと思ったけど。それがいけないことかどうかっていうのは、聞く人の耳にいいか悪いかなんて、関係ないんですよ。そこもいろいろ葛藤とかあったんですけど。

#### 《参加してみて》

(参加するようになってから) 忙しくなって。(休日の使い方も) 変わってきますね。自分の、1 人の時間が減ってきますかね。それまでもネットをぜんぜん使わない時ってあったんですけど、それも連絡を取り合ったりするのにできるようになったな、というのはありますね。活動自体にネットが便利だったことで、使うようになりましただけですね。

(続けて参加するのは) 金魚のフンみたいについていっているだけですね、僕は。彼女は活動メイン。僕はいろいろな方向性を考えてるんですけど、芽が出るかどうかよくわからないですけどね。とにかく、自分なりのアプローチを考えいきたいし、こういう活動を通していろいろ勉強していかないというものもありまして。(口汚くののしるのは) 逆に、それがどういう影響を及ぼすのかってのは予測がつかないんですよ。綺麗な言葉で耳障りのいいことを言っておけばみんなが賛同してくれるわけじゃないし。活動してもわからないというところがあって。「相変わらず馬鹿なことやってるな」と思いますよ、自分でも。でも、見てる方もバカ…同じアホだなんて。僕の場合、どちらかといったら利己的で薄情な人間かもしれないです。冷静に見て正視する人間も必要か

なと思っています。皆さんと一体になってやるというわけではなくて、引いて参加してますね。(彼女がいなければ) きっかけがなかったら参加しなかったでしょう。

今はたとえ彼女と別れたとしても参加すると思います。そこはやはり、自分にメリットがあるんだと思います。リアルとの接点というんですかね。(手応えは) ありますね。人脈だとか、普段、話すことのない人と話せるっていうか。講演会だとか、政治活動やられてる方だとか、そういう方と実際に。市役所の方とそういう話をするって、個人ではないわけですよね——やろうと思えばできますけど。いろいろなジョイントができる、その部分ですかね。

(よかったこと)「経験」と「先入観みたいなの」がなくなっていくのと、いろいろな自分の「経験値」ですかね。どういうアプローチを次からしていくのかを考えるうえで、選択肢が——いろいろな考え方が増えるというのが、すごく有益なことですよ。

#### 《関心があること》

一つの問題ではないですね。社会の問題はめまぐるしく変わっていくので、関心事項も変わってくるし、TPP 問題だとかいうのも国の——自分達の生活にはねかえってくる感じ、その部分で関心が(あります)。(在特会では) 活動をどう拡大していくというか、効果を上げるか、それが課題ですね。一番効果を上げられることを。(トピックでは) ほぼ全般というかなですね、不平等とかそういうことにつながってくるんですけど、理不尽な問題だとか。全般に対して、働きかけても効果がないことに対しては…。重点的にやるのはまず目先の目標をつぶしていくこと、これを活動にしたいなと思いますね。

(続けるエネルギー) 行動するってことは、形がつくっていうんですか、それに対して惰性で流れていくのはあって、それもあると思いますし。これからは時代の流れとか、社会がどういう状況にあるというのではなく、自分の責任でやっていこう、積極的に社会に悪いところがあったら働きかけようという考えでやってます。やる以上はいろいろリスクがありますからね、だからといってそんなにそのことに対して跳ね返ってくるほどの関心を持ってくれる人が逆に少ない。「何であんなことやっとなの」と反応がないというか、もっと活動を本格的にしてい

ないといけないのかな、反論が来ないと……。握手をしてくれる方とかはいますよ、関心を持って集まってくれる方とか。でも、一般の人は素通りですね。1000人おって1人くらいですね。そんなものですね。

## 5. 結語に代えて

N氏は、「ネットとリアル」の違いに対するこだわりを強く示していた。彼自身の情報源がほとんどインターネット経由であり、他のメンバーと異なり韓国の新聞の日本語版に目を通す点で、メディア・リテラシーは相対的に高いと考えられる。だが、彼はそうして得た情報を出して他者からの反応を得るような経験はなかった。在特会は、単にそうしたことを話す仲間を作るだけでなく、街頭行動を通じて彼なりの「リアル」な社会を経験する場となっている。

彼のイデオロギー自体は、「なぜ自分の世代にまで先祖の加害の責任があるのか」という、比較的良好にみられる被害者意識を軸としている。だが、交際相手のM氏ほどの確信犯的な極右ではなく、活動に参加するに際して交際相手からの「プル要因」が大きかったことは間違いない。このように生身の他者から運動に勧誘されることは、筆者の聞き取りでは実質的にないことであり、そこにN氏の特殊性がある。つまり、それほど極右的でないイデオロギーと運動参加の間には、交際相手という強力なプル要因があった。

だが、彼は今では交際相手がいなくても在特会に参加すると述べる。これは、単に趣旨に賛同するというだけでなく、それが彼にとって貴重な実社会との接点になっているからだろう。他のアソシエーションとの接点があれば、そこを通じて彼自身は社会に統合されていったらう。労働と小さな親密圏を越える範囲内で、極右的なものでなく市民的なもののプールをいかに作り出していくか。現実には、西欧では極右参加者は旧来型の組織に統合されていないことが指摘されてきた。パットナムの問題設定とも相通じるこうした課題も、長期的には極右研究の視野に入れる必要があるだろう<sup>1</sup>。

## 文献

- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)〜(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号。  
 ———, 2012b, 「在特会の論理(8)〜(9)」『徳島大学地域科学研究』1号。  
 ———, 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)〜(3)」『徳島大学地域科学研究』1号。  
 ———, 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号。  
 ———, 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号。  
 ———, 2012f, 「排外主義運動のミクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号。  
 ———, 2012g, 「在特会の論理(13)——大学生時代から『正論』を読んでいたM氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号。

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。

<sup>1</sup> もちろん、それに代わってインターネットが新たな動員構造になっていることは間違いない(樋口 2012f)。「ネット」と「リアル」の補完的な関係をどう築いていくか、この点についての研究も必要になるだろう。